

老年者疑似体験の学習効果についての検討 ——臨地実習での老年者とのかかわりからの評価——

老年看護学 中村令子・中山裕子・清水仁美

Achievement of the Student Nurse Practice Through the Experiential Learning of Aging

Reiko NAKAMURA, Yuko NAKAYAMA and Hhitomi SHIMIZU

要 旨

老年看護学では、老年者の理解を深めるための試みとして、老年者疑似体験を授業に取り入れている。この演習は、老化による感覚・運動機能の低下を学生が疑似体験することによって、老年者の身体機能が日常生活に及ぼす影響を体験的に理解し、さらにそれによる心理・社会的影響を考察することをねらいとしているものであり、老年者を理解し、老年者の立場に立った看護を実践するために有効な体験であると考えられている。今回、演習方法の見直しを行うために臨地実習で老年者との相互作用を体験した時に、老年者疑似体験がどの程度の効果を有するのかについて調査を行なった。

その結果、約8割の学生が実習で老年者と関わる際に疑似体験が役立ったとしており、疑似体験をもとにして、具体的援助方法の工夫、気持ちの理解、相手のペースに合わせる、見守る等の援助の留意点を考え、歩行や入浴の介助、聴力障害がある人との会話等の場面で活用することができていた。さらに実際のかかわりから、老化による日常生活への影響の大きさ、老年者個々の個別性、老年者の心理的側面への理解が深まり、介助者として、観察、個別性への配慮、自立を促す援助、声をかけることが重要であることに気づいていた。

I. はじめに

老年看護学は、高齢化が進む社会情勢に対応して平成1年の看護教育課程改正によって専門科目に位置付けられ、さらに平成8年の教育課程改正では、老年看護学実習が成人看護学実習から独立し、幅広い施設での実習が可能となった。本学においては、平成2年の開学の翌年から老年看護学実習に特別養護老人ホームでの実習を取り入れてきた。現在はさらに老人保健施設、リハビリテーション専門病院を加え実習を行っており、施設の特徴と看護職の役割と機能を理解して、他職種との連携を保ちながら看護を実践するための知識、技術、態度を習得することを目的としている。

しかし、老年看護学の教育内容の充実が求められている一方で、対象となる学生は核家族化の進行に伴い、老年者との生活体験が減少して

いる傾向にある。そのため学生がどのようにして老いを理解し、看護を学んでいくのかが、老年看護学教育における問題とされている。この問題を解決するために、老年者とのかかわりが少ない若い学生が、老年者に関心を持ち共感的に理解しようとする態度を身につけるための授業の工夫がなされてきた。その一つに老化に伴う老年者の身体的変化とそれによる心理的影響を単に知識の上でのみとらえるのではなく、体験的に理解することを目的とした、「老年者疑似体験演習」がある^{1,2,3)}。

この演習は、老化現象の中で疑似体験が可能な感覚器の機能低下、移動・運動能力の低下を学生が体験することによって、身体機能の低下を体験的に理解し、さらにそれによる心理的・社会的影響を考察することをねらいとしているものであり、高齢者の立場に立った看護を実践

表1 老年看護学の構成

老年看護学総論Ⅰ	老化とからだ・老化と心
老年看護学総論Ⅱ	高齢者の看護の場と役割・機能
老年看護学各論	高齢者に起りやすい日常生活の障害と看護 (老年者疑似体験演習を含む)
老年看護学実習	老人保健施設(2年次・3年次に分けて実施)
	特別養護老人ホーム(3年次に実施)
	リハビリテーション専門病院(3年次に実施)

するために有効な体験であると考えられている。

本学においても、表1のような授業構成のなかで、老年看護学各論の「高齢者におこりやすい日常生活の障害と看護」の授業に、老年者疑似体験演習を取り入れている。演習終了後に提出されたレポートの結果、老年者の行動の特徴が理解できた、日常の中での老年者への関心が深まった等の感想が得られており、講義への関心を高め、老年者の理解を深めるための演習として効果的であると思われた。しかしこの評価及び先行研究^{1,2,4)}は、いずれも演習終了時点での評価であることから、今回は、この演習体験が臨地実習においてどのように活用されているのかに関心を持った。そこで臨地実習終了後に、当科で実施している疑似体験演習が臨地実習においてどの程度の効果を有するかについて質問紙法による調査を行った。その結果をもとに今後の演習の進め方について検討を行ったので報告する。

II. 研究方法

1. 研究期間：平成9年11月から平成10年7月(2年次後期から3年次前期)
2. 研究対象：本学学生58名(平成8年度入学生)
3. 研究方法

1) 老年者疑似体験の概要

先行研究¹⁾を参考として老年者に起る機能低下の中から疑似体験の項目を選択し、これを感覚器機能の低下と運動機能の低下に大別して老年者役を設定した。感覚器の機能低下としては

表2 老年者役の設定

体験する機能低下	設 定
感覚器の機能低下	視力：ガーゼ1枚で目を覆う
	聴力：綿球を耳に入れる
	知覚：軍手とゴム手袋をはめる
運動機能の低下	腰に1kgの砂嚢をつける
	軍手とゴム手袋をはめる
	手首に1kgの砂嚢をつける
	肘関節に包帯を巻く
	足首に1kgの砂嚢をつける
	膝関節に包帯を巻く

視覚、聴覚、知覚(手指)を体験するものとし、運動機能の低下としては、関節の可動域の制限、筋力の低下、運動時の負荷の増大を体験するものとした。これらの機能低下を体験するための老年者役は表2のように設定した。演習は、学生を2人1組みとして、180分の時間内で老年者役と介助者役をそれぞれ1回ずつ体験するものとした。演習内容としては、前述のように設定した身体機能を必要とする日常生活行動として、更衣、歩行、排泄等の9項目を選択し、表3に示した番号順に行動するものとした。介助者役は鳴海²⁾らの研究をもとに設定したものであり、老年者役の学生の行動を観察しながらどのような時にどのような介助を行えば良いかを考えること、及び老年者役の立場で介助を受ける側の心理を考えることをねらいとした。老年者役の学生から依頼があった場合に、自立を考慮した援助を実施することをその役割

表3 老年者役の行動

生活動作	具体的行動
1. 更衣	寝衣を脱ぎ、運動着に着替える
2. 排泄	トイレで排泄し、手を洗う
3. 屋外歩行	靴を履き替え、屋外に出て体育館までの往復を歩く
4. 階段歩行	3階まで階段を昇る
5. 手指の動作	財布から100円を取り出し、自動販売機で飲み物を買う
6. 手指の動作 座位・飲食	椅子に座って、缶をあけ飲み物を飲む
7. 話を聞く	介助者役の学生と会話する
8. 文字を見る	新聞を声を出して読む
9. 階段歩行	1階まで階段を降りる

表4 調査用質問紙

老年看護学 実習後アンケート

2年生後期に行った「老年者疑似体験」の演習が、実習に役立ったかどうかについて、御意見をお聞きしたいと思います。以下の設問について、最もあてはまるものに○をし、その理由をお答え下さい。

1. 老人保健施設実習は、終了しましたか。 ①はい ②いいえ

2. 老年者疑似体験の演習は実習で役立ちましたか
①ほとんど役立たなかった ②あまり役立たなかった ③どちらでもない ④役立った ⑤かなり役立った

3. ①②③と答えた方にお聞きします。なぜそのように感じましたか

4. ④⑤と答えた方にお聞きします。
1) どのような場面で役立ったと感じましたか
2) なぜ役立ったと感じましたか

5. ここからは全員にお聞きします。
老年者疑似体験の演習後に提出したレポートの意見・感想と実習で実際に老年者に関わった後の現在のあなたの意見に、違いがあるかどうかをお答え下さい。
1) 「老年者の体験から感じたこと・考えたこと」について
①同じ ②あまり違わない ③どちらでもない ④少し違う ⑤かなり違う
<なぜそのように感じましたか>
2) 「介助者の体験から感じたこと・考えたこと」について
①同じ ②あまり違わない ③どちらでもない ④少し違う ⑤かなり違う
<なぜそのように感じましたか>

とした。平成9年11月(2年次後期)に演習を実施し、演習終了後には、①老年者の体験から感じたこと・考えたこと、②介助者の体験から感じたこと・考えたこと、について自由記載のレポート提出を課題とした。

この老年者疑似体験演習が、臨地実習においてどの程度の効果を有するかについて、臨地実習終了後に質問紙により調査を行った。

2) 調査方法

(1) 調査の時期

実習終了後の調査は、平成10年7月(3年次前期)に実施した。講義は、終末期・長期臥床状態にある老年者の看護(15時間)を残して終了している。実習は、調査前にリハビリテーション専門病院と特別養護老人ホームでの実習を全員が終了し、老人保健施設での実習は、2年次に26名が終了している。

(2) 調査方法・内容

自記式質問紙によって調査した。無記名と

し、それぞれの項目について5段階評価、及びその理由を記載するものとした。質問紙は、表4に示した。

III. 研究結果

1. 老人保健施設実習を終了したかどうか

老人保健施設実習を終了した学生は、26名、終了していない学生は32名であった。

2. 老年者疑似体験の演習が実習で役立ったかどうか

図1に示す通り、全体では、58名中45人(78%)の学生が、かなり役立った・役立ったとしており、どちらでもないとした学生は11名(19%)、あまり役立たなかったとした学生は2名(3%)、ほとんど役立たなかったとした学生はなかった。

3. どちらでもない・役立たなかったとした学生がなぜそのように感じたか

表5に示す通り、時間がたっていたので疑似

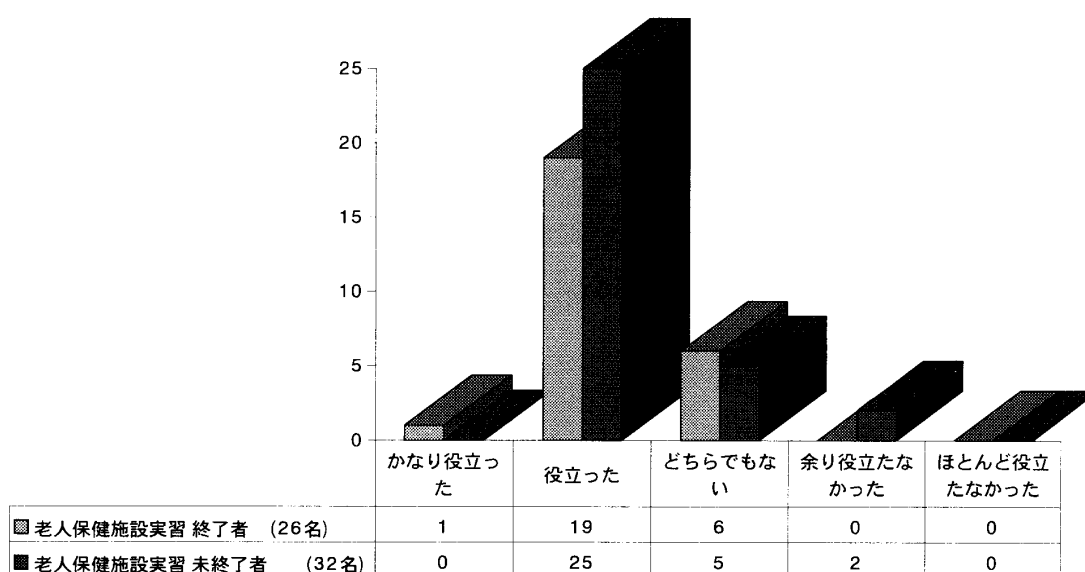


図1 疑似体験が実習で役立ったか

表5 どちらでもない・あまり役立たなかったとした学生がなぜそのように感じたか (N=13)

理 由	人数	老人保健施設実習
		終了者 / 未終了者
時間がたっていたので疑似体験を思い出さなかった	5	3/2
演習は現実感がなく深く考えられなかった	5	3/2
体験の条件のような老年者に接しなかった	3	0/3

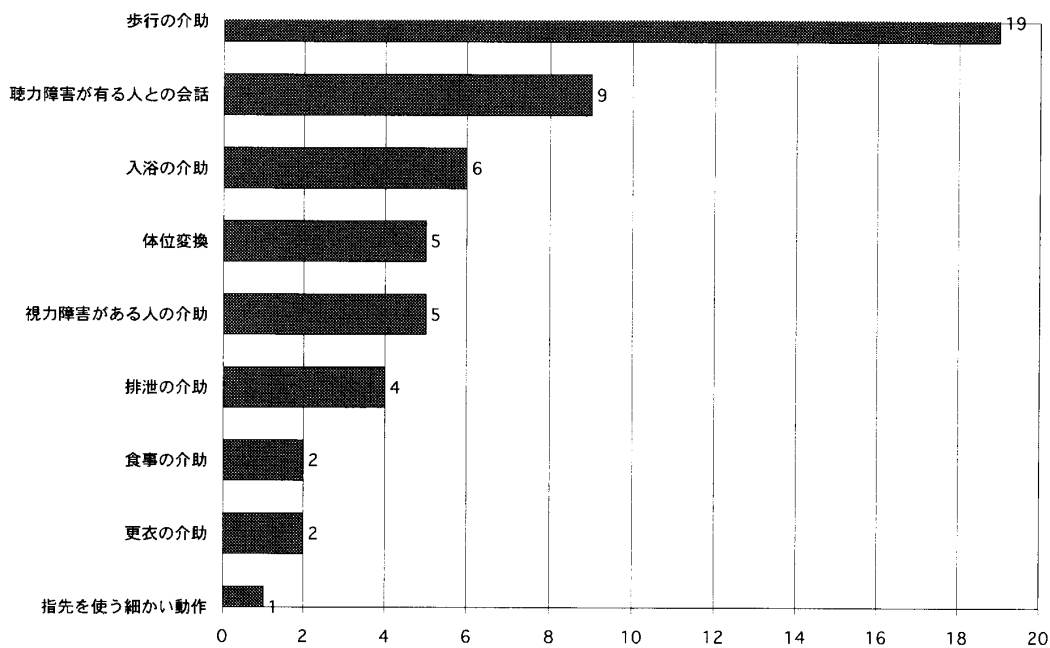


図2 役立つ場面

体験を思い出さなかった、演習では現実感がなく深く考えられなかった、体験したような老年人に接しなかったことがその理由としてあげられた。

4-1) 役立つ学生がどのような場面でそのように感じたか

図2に示す通り、歩行介助が19人と最も多く、以下、聴力障害がある人との会話、入浴の介助、体位変換、視力障害がある人の介助、排泄の介助、食事の介助、更衣の介助、指先を使う細かい動作の順であった。

4-2) 役立つ学生がなぜそのように感じたか

表6に示す通り、どのように介助すればよいか分かった、老年者の気持ちを考えることができた、老年者のペースで援助を行うことができた、すぐに介助せず見守ることができたという理由であった。

5-1) 老年者疑似体験演習後の「老年者体験のレポート」と実習で感じたこと・考えたことの相違点

表7に示す通り、演習と実際をかなり違う・少し違うと感じた学生が26%、どちらでもない16%、あまり変わらない・同じとした学生が58%であった。その理由としては、相違点を感じた学生は、自分の体験と比較して老年者の大変

表6 役立つ学生がなぜそのように感じたか
(複数解答) (N=53)

内 容	人数
どのように介助すればよいか分かった	24
老年者の気持ちを考えることができた	16
老年者のペースで援助を行うことができた	9
すぐに介助せず見守ることができた	4

さ、個別性、心理面に関することをあげていた。類似点を感じた学生は、自分が体験した老年者の特徴と同様の特徴が表れていたことがあげられた。

5-2) 老年者疑似体験演習後の「介助者体験のレポート」と実習で感じたこと・考えたことの相違点

表8に示す通り、演習と実際を違うと感じた学生が28%、どちらでもない10%、あまり変わらないあるいは同じとした学生が55%で、その理由は、相違点を感じた学生は、観察の重要性、個別性、自立を促すこと、声をかけることについて、演習では気がつかなかった介助の方法に気付いたというものであった。類似点を感じた学生は、注意と関心を向ける、ペースを合わせる、見守る、その人の立場に立つ、できないところを援助する、信頼関係を作るということに

表7 「老年者体験のレポート」と実習で感じたこと・考えたことの相違点 (N=58)

	人	%	理 由
かなり違う	1	26	老年者は自分の体験よりもさらに大変だと感じた
少し違う	14		老年者は自分の体験よりもさらに大変だと感じた
			老年者でもいろいろな人がいるので一概には言えない
			身体的特徴を体験しても心理面は分からなかったと思う
			身体的特徴は同様だとしても心の中はそれぞれ異なっている
どちらでもない	9	16	老年者でもいろいろな人がいるので一概には言えない
あまり違う	31	58	自分が体験した老年者の特徴と同じ特徴があらわれていた
同じ	3		自分が体験した老年者の特徴と同じ特徴があらわれていた

表8 「介助者体験のレポート」と実習で感じたこと・考えたことの相違点 (N=58)

	人	%	理 由 (実習で学んだこと)
かなり違う	1	28	演習では介助者の負担が少なかった
少し違う	15		できないところをよく観察することが大切だと気づいた
			安全を考えて観察することが大切だと気づいた
			一人一人の違い・個別性が大きいことが分かった
			自立を促すことが大切なことに気づいた
			声をかけながら援助することが大切だと気づいた
どちらでもない	10	10	演習では気がつかなかったことがあった
あまり違う	29	55	常に注意と関心を向けることは演習でも感じた
			ペースをあわせて援助することは演習でも感じた
			安全を考えて見守ることは演習でも感じた
			その人の立場になって援助することは演習でも感じた
			できないところを援助することは演習でも感じた
同じ	3		ペースをあわせて援助することは演習でも感じた
			すぐに手を出さず、見守ることは演習でも感じた
			信頼関係を作ることの大切さは演習でも感じた

ついて、演習でも感じたとしていた。

IV. 考 察

高齢化の進行に伴って老年者の看護への関心や必要性が高まる中、老年者との生活体験が減少している傾向にある看護学生が、老いを理解し看護を学ぶためにどのように講義を進めて行くのかについての検討が行われる必要がある。本学でも老年者の理解を深めるための試みとし

て、老年者疑似体験を授業に取り入れてきた。この演習は、老化による感覚・運動機能の低下を学生が疑似体験することによって、老年者の身体機能が日常生活に及ぼす影響を体験的に理解し、さらにそれによる心理・社会的影響を考察することをねらいとしているものであり、老年者を理解し、老年者の立場に立った看護を実践するために有効な体験であると考えられている。しかしこの評価は、演習終了時点での評価

であることから、今回は、この演習体験が臨地実習においてどのように活用されているのかに関心を持ち、疑似体験演習が臨地実習においてどの程度の効果を有するかについて質問紙法によって調査を行った。

その結果、約8割の学生が、実習で実際に高齢者とかわる際に役立ったとしていることから、疑似体験演習は実習においても高齢者の理解を深めることに効果があったと考えられる。なお、老人保健施設実習の体験に差がある学生を対象としたが、特別養護老人ホーム、リハビリテーション専門病院での実習は全員が終了していることから、有効性の見方についての大きな差はなかったと考える。役立った内容としては、高齢者と関わる際の具体的な援助の方法、気持ちの理解、高齢者のペースにあわせる、見守る、等の援助における留意点を考え、実践することができたという効果が示されている。役立った場面としては、歩行の介助が最も多く、以下演習で体験していた項目があげられていた。歩行については演習の中での体験時間が最も多かったことや介助する場面が多いことによる影響が考えられる。演習では体験しなかった入浴介助、体位変換については、歩行の体験から応用して考えることができたものと思われるが、実習で多く体験する援助であることから、今後の演習に取り入れることを検討したい。

一方、どちらでもない・役立たなかったとした学生で、実習では設定のような高齢者とは接しなかったというのは、設定した身体機能の全部の条件を持っている高齢者に接しなかったということではないかと考えられ、疑似体験を思い出さなかった、現実感がなく深く考えられなかったとしている学生も含めて、演習前後の意識づけを確実に行う必要性が示されているものと考えられる。意識づけが十分でなかった原因としては、先に演習の概要で述べたように、現在の演習が多く生活行動を一度に体験させるという設定であることから、それぞれの行為についての考察が浅くなっていることが考えられる。そのため一つ一つの生活行動を丁寧に体験させるような組み立てにして行くことが効果的

ではないかと考えられる。例えば、牧野ら⁴⁾は「車椅子での外出」、鳴海ら²⁾は「腰曲げ歩行」という一項目に絞った体験学習を実施して、それぞれの行為の体験を振り返らせながら援助の方法を考察させているように、生活行動の一つ一つを取り出して演習を行うことによって、全体に共通する高齢者の援助の方法と、それぞれの生活行動毎の援助の特色が整理できるような演習を計画することも効果的であると考えられる。また、前述の「演習の設定のような高齢者に接しなかった」という学生の感想は、老人保健施設実習を行っていない学生からのものであることから、経験が少ないことによるものとも考えられるが、小川⁹⁾が、「体験学習によって逆に老年期の対象へのステレオタイプの理解へつなげる可能性」を指摘しているように、演習の設定に捕われてしまいその他の高齢者の特性に目が向けられなかったことを示しているとも考えられる。このことは、例えば野口^{6,7)}が、身体的障害を一様に体験させるのではなく、心理・社会的条件をも加えて参加者それぞれがさまざまに異なった生活の変化を体験できるシュミレーションゲームを開発し実施しているように、現実感があり、多様性のある演習の設定を検討することによって改善できる可能性がある。また、高齢者の条件設定をこちらから与える形ではなく、グループワークの形式をとって学生自身が検討することも効果的ではないかと考えられる。

高齢者役の演習後と実習後に感じていることの比較からは、高齢者に実際に接することによって機能低下による生活への影響の大きさ、高齢者個々の個別性、心理的側面への理解が深まったことが感じられる。介助者役の比較からは、観察、個別性への配慮、自立を促す援助、声をかけることの大切さに気づいたことがあげられている。これらはいずれも高齢者の看護において重要な事柄であるので学生全員に意識づけていくために、演習後、実習終了後の評価を、自由記載に加えて今回抽出されたこれらの項目についても実施したいと考えている。

V. 結 論

高齢者疑似体験演習の効果、臨地実習終了後の学生を対象として評価した結果、次のことが明らかになった。

1. 疑似体験演習は、学生が実習において高齢者と関わる際に体験をもとにして援助の留意点を考え、実践することができたという点において効果が認められた。
 2. 実際に高齢者と接することによって、機能低下による生活への影響の大きさ、高齢者個々の個性、心理的側面への理解が深まったことがわかり、介助者として、観察、個性への配慮、自立を促す援助、声をかけることの大切さに気づいたことがわかった。
 3. 今後は次のことを修正することによって演習の改善が図られると考える。
- 1) 更衣、排泄、歩行等の生活行動を細かく設定し、共通する援助の方法と、それぞれの

生活行動や場面に個別のものが整理できるような演習とする。

- 2) 現実感があり、多様性のある演習を実施するために、身体的側面だけでなく心理・社会的側面の条件も加えた高齢者の設定を学生自身に検討させる。
- 3) 演習の評価項目を示し、高齢者の看護を行なう際の留意点を明確化する。

VI. おわりに

今回の研究で臨地実習における学生と高齢者との関わりから高齢者疑似体験演習を振り返ることによって、学内での講義・演習の進め方を検討することができた。今後も授業の評価方法を検討し、学生が高齢者とお互いに心に残る関わりを持ち、一人一人の立場に立った援助を実施できる看護者として成長することをめざす演習に向けて、どのようにして準備状態を整えて行けばよいのかについて研究を行って行きたい。

引 用 文 献

- 1) 平出恵子, 小高京子: 看護学生の老人に対する疑似体験, 第27回日本看護学会収録(看護教育), 131-134, 1996.
- 2) 鳴海喜代子他: 老人を理解するための体験学習の意義について—腰曲げ歩行の体験学習の検討から—, 第23回日本看護学会収録(看護教育), 156-159, 1992.
- 3) 宮地緑: 老年看護学の進め方, 松木光子監: 看護学臨地実習ハンドブック, 第5章 老年看護学, 金芳堂, 1996.
- 4) 牧野裕子他: 障害高齢者体験学習の効果—車椅子生活におけるアセスメント項目に焦点を当てて—, 第27回日本看護学会収録(看護教育), 135-138, 1996.
- 5) 小川妙子, 定廣和香子: 老人看護学教育研究の動向と今後の課題, 看護教育, 36(5), 454-459, 1995.
- 6) 野口美和子: 看護基礎教育における老人看護学, 日本看護学教育学会誌, 6(1), 1996.
- 7) 佐藤弘美他: 老人理解のための体験学習—INTO AGING—, 看護展望, 18(8), 32-36, 1993.